

キラキラ フレンド

青木 美都

ルルルル

ぼくは、びくつとしてソファから転がり落ちた。いつのまにねむってしまったんだろう。あわてて受話器をとる。

「ゆうまか？」

お父さんのひそひそ声が聞こえる。

「お父さん、どうしたの？」

「ごめん。今日、帰りがおそくなるから、先にごはん食べて、ねててくれ」

「ええっ」

ぼくは、受話器を落としそうになった。

「もう四年生だから、それくらいできるだろう」

お父さんに『それくらい』っていわれて、もっと頭の中が真っ白になった。でも、
「うん。わかった」

そうやって受話器を置いた。お父さんは他

にも何とかいっていただけ、覚えていない。

台所に行くと、お母さんが昼間作っておいてくれたカレーを、ぼんやりしながら温めはじめた。

カレーのにおいが台所にひろがる。いつもだったらうきうきするのに、ちっともうれしくない。だれもないテーブルを見る。でもすぐに目をそらした。

弟のりんが、ぜんそくで入院することになった。お母さんもりんのつきそいで病院に行っている。りんはまだ一年生だからお母さんがいないと眠れないんだ。

「はあ」

ためいきが出た。きのうのりんの苦しそうな顔がうかぶ。小さなせなが大きく上下に動いて、ひゅうひゅうって音までしていた。

テーブルにカレーを運ぶと、早食い競争みたいに急いでカレーを食べた。はじめての『ひとりぼっちの夕食』は、はっきりいっておいしくなかった。

それから、一人でおふろに入って、二階のぼくの部屋に上がる。ベットにとびこむと、ふとんを頭からかぶった。だけど、全然ねむれない。

カチカチカチ。

時計の音がじやまをする。耳を両手で押さえた。

真夜中だっというのに、どンドン目がさええていく。ベッドから出ると、電気もつけず、まどを開けてみた。空には、たくさん星が出ていた。

空を見ていると、すいこまれるような感じがする。すいこまれて、ぼくが消えてなくなってしまうそう。むねのおくがきゆうつとした。

「お母さんとりんはどうしているんだろう」
そうつぶやいたら目のおくが、じわっと熱くなってきた。お母さんとりんに会いたい。
なみだがこぼれそうだ。その時、ひとつの星がさーっと動いた。

「流れ星だ」

ぼくは、とっさに目をとじた。願い事をするんだ。

「りんが……」

そういったところで、

ドン。

近くで音がした。

そうつと目を開けると、まどのすぐ下の屋根に何か見える。

真っ暗でよくわからないけど、目をこらしているると少しずつ見えてきた。

な、何だ！ この黄色いもの。わっ、服を着ている。銀色のマントだ。小さいなあ。ねこなのかな？ ねこにマントなんて着せないか。

あっ、手も足もある。やっぱり、ねこじゃない。小さい子どもだ。それも星の形のお面をかぶっている。

その小さな子どもがピクツと動いた。

「だれなの？ どうしたの？」

ぼくが声をかけると、

「どうしたもこうしたもねえ」

その子がぼくのほうをふりかえった。

「わ、おばけ」

ぼくの足は、がくがくふるえはじめた。だ
って、顔が真っ黄色で星形なんだもん。お面
だと思っていたら、本物の顔だったんだ。

「失礼なやつだな。お前は、バカか。おばけ
なんかじゃないわい。流れ星に決まってんだ
ろ」

ぼくは、まばたきもわすれて、流れ星をみ
つめた。

「お前、さつき何で願い事をいわなかったん
だよ」

流れ星がぼくをにらみつける。小さいけど、
はくりよくがある。

「そんなこといわれても」

返事にこまっていると、かみつくように、

「あのな、お前、知ってんの？　流れ星は人
の願いをかなえると、花に生まれかわれるん

だぜ。きれいな花にな。でもな、かなえられ
なかったら」

そこまでいうと、流れ星はだまった。

「ねえ、かなえられなかったらどうなる
の？」

つい聞いてしまった。流れ星は、まゆをよ
せると、

「二十四時間後に、消えてなくなる」

ぼそつといった。

「えっ、消えちゃうの！」

自分でもびっくりするほど大きな声だった。

「そうさ、このまま自分が消えてなくなるの
を待っただけさ」

流れ星は悲しそうにうつむいた。

「ぼく、知らなかったから、ご、ごめん」

「そんなこといいさ。運命だからな。ところ
でお前、何で泣いてんのさ」

「泣いてなんかいないよ」

流れ星にゆびさされて、ぼくは急いで顔を
ぬぐった。

「何で、泣いてるのか話せば、さっきのことはゆるしてやるよ」

「なんだ、流れ星は、やっぱりおこっているんじゃないか。ぼくは、りんのことを話しはじめた。」

「早く退院してほしいな」

「さいごにつぶやいたら、流れ星は、お前、どんくせーからな。オレもいっしょに流れ星さがしてやるよ。今度は、ちゃんと願い事をいえよ」

ぼくの目をみつめた。ぼくは、こくんとうなずいた。

「あのう、流れ星さん」

「オレ、キラっていう名前。キラってよべよ。で、お前は？」

「ぼくは、ゆうま」

「ゆうま、もう今日は、つかれたよ。ねむらせてくれ」

キラは部屋にぴよんと、とびうつった。すごいジャンプ力だ。人間とはちがう。関心し

ている間に、キラは、ぼくのふとんの中にもぐりこんでいた。

「あのう……」

「ぐうう」

もういびきの音しか聞こえない。

「えっ、何で？ 流れ星をさがすんじゃないの？ もうっ。うそつき」

ぼくは、気持ちよさそうにねむっているキラにぶつくさ文句をいった。

それから、一人で夜空を見上げた。

気がついたら朝だった。ぼくは、まだ側のかべにもたれて、ねていたようだ。まだねむい。目をこすりながらふとんを見ると、小さくふくらんでいる。静かにふとんをめくった。

「わあ」

ゆめじやなかつたんだ。キラがまるまってねむっている。

「うるさいなあ。目がさめちまつただろ」

キラは、のびをすると、立ち上がった。せは、ぼくのひざこぞうまでしかない。顔は……

…、やっぱり星の形だ。こんなの変だよ。

「お父さん、大変だ！」

あわてて一階へ降りる。返事がない。

「お父さん」

もう一回よんでみた。やっぱり返事はなかった。かわりにテーブルの上に、メモがおいである。

『ゆうまへ』

おはよう

仕事があるので、早く会社に行きます
ちこくするんじゃないぞ

今日は、早く帰ってくるからな

お父さんより』

ルルルルル。

電話がなった。

「はい。もしもし」

受話器をとると、お父さんだった。

「ゆうま、起きたか？」

「うん。あのね、お父さん」

「話は帰ったらゆっくり聞きよ。ちゃんと朝

ごはん食べて、学校へ行けよ」

「あっ」

「じゃあな」

ツーツーツー。

体中の力がぬけていく。

「お前、泣き虫だな。ははは」

キラが、ぼくの足もとにいた。泣きそうな僕を見て、おなかをかかえてわらっている。けとぼしてやろうかと思ったけど、だまっていにらみつけた。

夜になって、お父さんがもどってきたらおいだしてもらおう。でも、その前にキラは消えてしまうかもしれない。どちらにしる今は、ほうっておこう。

キラのほうを見ないようにして、トーストを焼いた。

「何だよ、それ」

キラが話しかけてくる。ぼくは聞こえないふりを続けた。

キラにせなかをむけると、トーストを食べ

はじめた。

「うまそうだな」

キラの声が近づいてきている。いつのまにか、キラはテーブルの上にのっぺいした。ムカムカしたけど、知らんぷりを続けた。

「それ『地球のパン』だろ？ オレ、知ってんだぜ。食ってみてーな」

いたいほどキラのしせんを感じる。ぼくがトーストを口にしたらたん、反対側をキラがかぶりついてきた。

「おおっ、うめーな」

そういつてまたかじりついてきた。ぼくも負けないようにかぶりついた。キラの顔がとても近い。近くで見るとキラは、意外とかわいい顔をしている。ふと、りんの顔がうかんだ。

とつぜん、キラがへんな顔をした。ぼくは、プツとわらってパンをはなした。

「オレの勝ちだ」

キラは黄色いほほを、ピンクにそめてガッ

ツポーズをする。何だかおかしくって、わら
っちゃった。

キラをゆびさして大わらいしていると、ま
すますキラの顔はピンクになっていく。これ
じゃ、まるで星じゃなくてヒトデだ。そう思
うとわらいがとまらない。

キラもわらっている。

「もつと食べる？」

ぼくが聞くと、

「おっ、おう」

うれしそうにうなずいた。

それからぼくたちは、いっしょにもう一枚
ずつトーストを食べることにした。

ぼくは、冷蔵庫の中にあるものを出しはじ
めた。マーガリンにジャムにハム……。キラ
も手伝ってくれる。二人でテーブルの上に一
つずつならべていく。そのたびに、ワクワク
してくる。

「一度やってみたかったんだ」

ぼくは、イチゴジャムとプリンとチョコレート

トをトーストにたつぷりのせた。キラは、
にやにやしなからキムチとわさびをのせ、マ
ヨネーズをかけていた。

「それ、ぜったい、まずいよ」

ぼくがいうと、キラは、

「うまいに決まってるだろ」

そういって、大きな口でかぶりついた。キ
ラは、顔をゆがめながら、

「うめーな。うめーな」

と連発している。ぜったいいうそだ。その横で、
ぼくは、

「うわー、あまーい」

口のまわりにイチゴジャムやプリンがつく
のを気にせず、トーストをなめた。

「ひとくち、食わせろ」

「あっ」

「うわっ、これはうめー。オレのとうかん
してやる」

むりやりおしつけられた『キムチ・わさ

び・マヨネーズ』トーストを、いやいやかじ

ってみる。もちろん、何もついていないところを選んでだけ。

「本当においしいかも」

ぼくがそういうと、キラは、

「やっぱり返せ」

そういうって残りを全部、口におしこんだ。

とたんに、キラの顔が、けわしくなる。

ごくん。

トーストをのみこむと、何もいわない。なみだ目になっている。

「だいじょうぶ？」

キラの顔をのぞきこんだ。

「おっ、おう。あったりめーじゃねえか」

「くるしそうだけど」

「しつこいなあ。それよりお前の顔、ひどいぞ」

そういつてキラは、ティッシュをぼくにさし出した。ティッシュがひつようなのは、ぼくじゃなくて、キラのほうだ。

ティッシュをうけとると、いっしゅん、お

母さんみたいだっと思って思った。『ゆうま、口のまわりすごいわよ』とお母さんにいわれているみたいで、照れくさかった。

朝食を済ませると、

「じゃあ、いってきます」

キラにあいさつをすると、元気に学校へ出かけた。

学校から帰ってくると、家のまどが開いている。お母さんが帰ってきているんだ。いきおいよく玄関のドアを引いた。

ドアは開かない。かぎがかかっていた。

そうだ、お母さんをびっくりさせてやろう。

ぼくは、ささっとランドセルからかぎを出すと、静かにかぎを開けた。

「お母さん」

大声でそう言って家の中にかげこんだ。

家の中は、しーんとしている。お母さんはどうしたんだろう。庭につながるまどが開いていて、カーテンがゆれている。ぼくは急い

で庭に出た。

そこには花に水をやっているキラがいた。

小さなキラは、花と見まちがえそうだ。

キラはまぶしそうに花をみつめていて、ぼくには気がつかない。

「キラ、ただいま」

「おっ、おかえり」

びっくりしたようにキラがふりむいた。

「ねえ、お母さんは？」

「病院にもどった」

「そっか。そうだよね」

ぼくは、いいきかせるように、頭の中でそうだよねってくり返した。

「お母さん、ゆうまのこと、すげー心配してたぞ」

キラがぼくの顔をのぞきこんだ。

「お母さんと話したの？」

ちよつとドキドキしながら聞いた。

「本当にゆうまはバカだな。オレを見たらびつくりしてお母さんまで入院だぞ。かくれて

見てたに決まってるだろ」

「じゃあ、何でわかるの」

「オレは流れ星だぞ。何でもわかるのさ」

「本当？ うそでしょ」

「ゆうまは、泣き虫でバカでその上、失礼だな。わかるっていったら、わかるのさ」

「ふーん」

キラが何でもわかるっていうのは、うそだ。だって、朝食のトーストは、どう考えたって失敗じゃないか。

でも、お母さんがぼくのこと心配してくれたのだったらうれしい。そつと目をとじた。

「お母さん、ゆうまのことを思いながら夕食作ってたぞ」

キラの言葉に、ぱつと目を開けた。

「何を作ったの？」

「からあげ。どうせ、ゆうまの好物なんだろう」

「うん。ぼく、からあげ一番好きなんだ。半分、キラにもあげるよ」

「オレはいいよ。さつき、つまみ食いしたから」

「キラ、ずるいよ」

「ははははは」

キラといると、さびしいのがとんでいく。

「ねえ、キラ、遊ぼう」

ぼくは、いつの間にかキラが好きになっていた。

「水やりが終わったらな」

キラはホースを持ちなおした。

「キラって花が好きなの？」

「いやあ、オレ、もし花になってたらどんなだったのかなと思って。オレだったら、多分、この花じゃねえかな」

キラがゆびさしたのは、アカプルコっていうピンクのユリだった。どことなくキラに似ていた。

「キラ」

ぼくには、その後の言葉がみつからなかった。

「別に悲しくなんてないさ。今、こうやって花の気分を味わってるからよ」

キラはそういって、手に持ったホースを自分の頭に向けた。シャワーがキラにかかる。

「ははは、つめてーや。ゆうま、お前にもかけてやる」

キラは、ぼくにホースを向けた。ぼくもあつというまにびしょぬれだ。

「ひゃ、つめたい。もう、キラったら。あつ、そうだ！」

急いで水でっぼうを用意した。

「キラ、いくよ」

水でっぼうをキラに向ける。キラはジャンプで次々と身をかわす。

「へっへっへ。やっぱりゆうまは、どんくせーな。こっちだぞー」

すばしこいキラが、庭を走り回る。ぼくも水でっぼうをかまえて追いかける。水やりが水かけっこになっていた。

ぼくたちは、いつまでも遊んだ。わざわざ

水やりしなくても、花にもいっぱい水がかか
ったんじゃないかな。

ホースのかたづけをしながら、
「今度は、負けないからね。いっぱい水をか
けてやるから、かくごしておいてね」

そういって手をとめた。『今度』ってある
のかな。

キラは何事もなかったように、
「ゆうまには、ムリ、ムリ。オレに勝つなん
て、百年は、はえーぞ」

にくたらしそうにいった。
それから、家の中でランプもした。楽し
かったけど、辺りが暗くなるにつれて、むね
のおくが、ちくつてしてくる。

「キラ」

「なんだよ、ゆうま」

ぼくはだまりこむ。今日でキラとお別れな
んだろうか。

「お父さん、ちゃんと帰ってくるって。心配
すんな。それまでオレがいるからよ」

小さなキラは、とびあがってぼくの頭をぐりぐりなでた。そうじゃないんだっていえなかつた。かわりにぼくは、つくりえがおをした。キラもわざとらしくわらった。

お父さんは、なかなか帰ってこない。

ルルルル。

電話がなる。

「お父さんかな」

ぼくが電話に出ると、やっぱりお父さんだった。今日もおそくなるらしい。

ちらっとキラを見た。

ぼくはだいじょうぶ。一人じゃないから。

大きく息をすいこむと、

「お父さん、ぼく、だいじょうぶだから。しっかり仕事してきてね」

どうどうといった。さっぱりした気分だ。

「ゆうま、生意気いうようになったな。今度の休みは、いっぱい遊ぼうな」

お父さんは、安心したように電話を切った。

「ゆうま、だいじょうぶか」

キラは、ぼくがまた、泣くと思っ
ているの
だろう。

「もちろん、だいじょうぶ。さあ、早く食
べ
て流れ星を見つけよう」

「お、おう」

キラが目をぱちぱちさせて、ぼくを見てい
る。

からあげを半分こにして食べると、急いで
二階に上がった。

まどを大きく開ける。

「いいか。ゆうま。流れ星を見つけたらすぐ
に願い事をいうんだぞ。手なんかあわせなく
てもいい。もちろん頭を下げなくていい。よ
うするにスピード勝負だ」

キラが熱く語っている。ぼくだってしんけ
んだ。

「うん。わかった」

二人で空を見上げる。気持ちのいい風が顔
にあたる。

「オレがさがしてやるから、ゆうまは練習し

ろ」

キラはまどから身をのりだしている。

「りんが早くよくなって、退院できますように」

ぼくがつぶやく。すると、キラが、

「ゆうま、そりゃ、ちよつと長いな。もつと短くまとめてみな」

空から目をそらさずにいった。

「あっ、うん。『りんがよくなりますように』でいいかな？」

キラの顔をうかがう。やっぱりキラは空から目をそらさない。

「そうだな。じゃあ、いつてみな」

ぼくは、できるだけ早口で、

「りんがよくなりますように」
くりかえした。

「おう、そうだ。でも、あと、百回くらいは練習しとけ。ゆうまはどんくせーからな」

ぼくはいい返そうと思ったけど、キラのいうとおりにした。

「りんがよくなりますように」

そういうたびに、なぜか、もやもやしてくる。

今、ぼくはキラといっしよに空を見ている。やっぱり空にすいこまれそうな感じがする。でも、こわくない。となりにキラがいるから。「オレ、もうすぐ消えちゃうけど、ゆうまに会えてよかったよ。あー、おもしろかった。からあげもおいしかったしな」

キラは星をさがしながら、声だけぼくに向けた。

「ぼくだって。ぼくだって……」

ぼくはしっかりとキラを見た。なみだがあふれてくる。

「あっ、ゆうま。流れ星だ。いえ」

「キラがもう一度、流れ星になりますように」

ぼくは、いっしよけんめいいった。

「ゆうま」

キラは、そういうと、びっくりした顔のまま、ぱっとその場から消えた。

ぼくはもう一度、空を見上げた。ひとつの星がキラキラつとかがやくと、さーっと流れていく。ぼくは、

「りんがよくなりますように」

練習どおりにいった。流れ星は、ぼくの願いを聞いたぞっていうように、ピカッと光ると消えていった。

「キラ、ありがとう」

大きな声で空に向かってさげんだ。

ガタン

げんかんのドアが開く音だ。

「ゆうま、ただいま」

お父さんが帰ってきた。

「おかえり、お父さん」

バタバタと一階におりると、

「ゆうま、さっきお母さんから電話があって、

りん、明日、退院できるんだって。ゆうまもよくがんばってくれたな」

お父さんは、ぼくを力いっぱいだきしめた。

次の日、お母さんとりんが帰ってきた。

みんなで庭に出ると、アカプルコの花がまたひとつさいていた。

ぼくは、いっぱい水をかけてやった。アカプルコの花がふるふるってゆれる。まるでおなかをかかえてわらっているようだった。